



バスターミナルとゾウ。今回のプロジェクトが行われたのはケニアの先住民マサイが住む地域

THIS EMPTY WORLD
人類と自然の衝突が生む「空虚」

PHOTOGRAPHS BY NICK BRANDT

無秩序な開発と急激な人口増加により、人間の居住地が野生動物の楽園を侵食し続けている。写真家ニック・ブランドが写真集『デイス・エンブティ・ワールド』で訴えるのは、そうした途上国での悲劇的な実状だ。写っているのはゾウなどの野生動物と人間、そして人工的な

建造物が同居する奇妙な光景だが、これらは現実ではない。動物と人間それぞれを同じ場所で撮影し、合成したものだ。ブランドのチームはまず最低限の撮影セットを組み、動物が通るのを何週間も待つ。撮影に成功したら、次はカメラを固定したままバス停や工場、工事

現場といった大掛かりなセットを用意し、エキストラとなる人々を配置して再び撮影する。この2つを合わせた作品は、確かに架空の光景だが、既に世界で起きていること、そしてこの地で間もなく起きる現実を象徴的に表している。もう1つ、ブランドは住む地

を奪われる動物だけでなく、ここに移り住まざるを得ない周辺地域の人々も同じく被害者だと訴える。彼らもまた元の生活と、生活の糧にしてきた豊かな自然という「資源」を奪われているのだ。写真には写らない、開発業者や政治家など目先の利益を優先する人間によって。

N

水の枯れた川とハイエナ。この写真集のプロジェクトにかかった費用は当初の予算の2倍に達した



橋の建築現場と作業員とゾウ。ハリウッドさながらの大規模なセットが組まれている



架空の建造物 上写真の撮影風景。ゾウが通る姿を捉えたカメラを固定したまま、画角に収まるよう架空の建築現場を造り上げる。使った資材は次の現場で再利用し、セットの痕跡は一

切残さないという。ブランドが共同設立したNPO団体はアフリカ東部の8000平方キロメートルの土地で密猟の監視などを通じた自然保護活動を行っている

サバンナのライオンと人間。エキストラを集めて行われた「第2部」の撮影は2カ月を要した

Picture Power



立ち並ぶ人間とサイ。エキストラとして撮影に協力するのは周辺地域に住む人々

燃える木炭とゾウ。「この空っぽの世界」を意味する写真集のタイトルには、環境破壊などで姿を消す動物への問題意識が込められている



バスターミナルとライオン。動物が撮影された時間に合わせ、ほとんどの作品は夜のシーンとなっている

撮影:ニック・ブランド

ロンドン生まれ。美術大学で映画と絵画を学び、2001年から東アフリカで野生動物をテーマに作品を制作。10年にビッグ・ライフ基金を設立し、約300人のレンジャーによって密猟を監視するなど動物保護活動を展開している。本作は最新写真集「ディス・エンpty・ワールド」(英テムズ&ハドソン社)からの抜粋

Picture Power

Photographs from "This Empty World" by Nick Brandt, published by Thames & Hudson

